

岩 波

心 理 学

小 辞 典

宮城音弥編

序

この辞典は長い間一般に愛用されてきた(岩波小辞典心理学)を発展充実させたものである。小辞典をつくったとき、私はなるべく、つぎの原則にしたがおうとした。

- 1) あくまで心理学の辞典という特質を見失わないこと。
- 2) 自分ひとりで執筆すること。
- 3) 一般の人が読んでわかるものにする。
- 4) コトバの意味を明確にし、類似のコトバとのちがいははっきりさせ、また、同じようなコトバが英語、ドイツ語、フランス語でどうちがっているかを指摘すること。

本書でも、この方針を無視しなかったが、用語数を増加した機会に、心理学を学ぶ者に都合がよいような配慮を加えることにした。

1. あくまで心理に関するコトバを主にしたけれども、心理学の研究手段としての統計用語、心理学の実験に使われる物理学の用語、心理学の説明に用いられる生物学や生理解剖の用語(これらは多く他の専門の辞典に頼ることのできるものだが)をも取り上げることにした。心理学概論で遭遇するこれら他の領域のコトバの解説は学生にとっては必要であるばかりでなく、数理心理学・計量心理学・生理学的心理学・薬物心理学の発展はそれを無視することのできないものにしたからである。これらも、なるべく読んでわかるようにしようと努力し、複雑な数式などは巻末の付録にした。

2. わが国で今日、ある程度ひろく用いられている、いくぶん流行的な色彩をもつ用語をも加えた。わが国の概論その他には、アメリカで最近提唱された用語が使われることが多く、心理学を学ぶ者のうちにその解説を要求することがないわけでないからである。

とはいえ、あまりにも心理学に直接関係のない解剖学的用語、化合物の説明、数学上の諸公式のために、愛とか嫉妬とか虚栄心とかいった心理現象を無視することなく、また、ある種のテーマについて特定の学派の説明にのみ固執する態度はとらなかつた。流行語のうちにも将来、世界の学界の市民権を獲得するものもあるが、諸外国の辞典を参照したうえで、あまりにも一般的でないものは採用を見あわせた。“スキんシップ”といった日本製英語などを除外したのもそのゆえである。それに対して超能力を扱う超心理学は、まだ科学として十分に確立していない要素があるために日本では、とくにタブー視する傾向もないわけではないが、その用語や専門家名を排除せずに採用することにした。

また、アメリカ心理学一辺倒でなく、ヨーロッパ心理学の用語、ヨーロッパの学者をも無視しなかった。

今日、心理学という学問の関口はきわめてひろく、哲學的心理學と廣告心理學、

生理学的心理学と臨床心理学といったものでは、まったく専門のちがう印象をうけるであろう。とくに、わが国では心理学者が狭い専門の壁のなかに閉じこもっていることが多く、それらの人たちの執筆するものは、同じ心理学でありながら、他の分野の者には了解できないことが少なくない。本書は心理学者が自己の専門以外の心理学用語を知るためにも役立つものと信じているのである。

むろん、このように広い開口をもつ心理学の全領域にわたる用語の説明を、ひとりの手で正確に行なうことは容易なことではなく、本書執筆中に公にされた、いくつかの心理学小辞典はすべて100人以上の心理学者によって執筆され、範囲を限定した教育心理学だけの小辞典でも100人近くが動員されている。私ひとりで筆をとったとはいえ、本書の成立までには多くの方々の援助を頂かねばならなかった。本書の前身たる小辞典をつくった段階では、八木堤教授(現、東京大学名誉教授)、故田中良久教授に綿密な検討をお願いしたし、多湖輝、安田一郎、原野広太郎、橋山貞登、坂元昂といった現在有名教授として活躍している諸君に資料の収集の手伝いを依頼した。今回、計量・数理心理学の用語を採用するに際しては、橋山教授および、その研究室の方々とともに同じ東工大の中村健二郎助教授にお世話になった。これらの方々には心から感謝しなければならない。

ひとりで執筆することによって、心理学辞典にしばしばみられる用語選択の不均衡や表現の不統一を、ある程度は回避できたとしても、執筆が長期にわたったために、それも完全ではなく、同じコトバについての訳語が、べつの項目で異なっていることもあった。これらを統一するとともに心理学を専攻していない一般の人たちにとって了解困難な箇所を訂正することができたのは岩波書店の担当諸氏の努力のおかげであって、辞典なるものが依然、協力の産物であることを痛感しないわけにいらなかったのである。

〔用語または訳語について〕

用語または訳語は、さきの『岩波小辞典心理学』と同じ方針によった。すなわち、私自身も加わった文部省の学術用語分科審議会の心理学部会のもので、すでに決定しているもの、および、精神医学用語統一委員会の精神医学用語集(1970)の案の訳語になるべくしたがうことにするとともに、概論書などの習慣的用語を採用することにした。

例外的にそれらと異なったものを採用したのはつぎの場合である。

1) 上述の審議会、委員会の案が伝統的習慣と異なっているばかりでなく、伝統的訳語がそれほど不適当でないとき。たとえば、心のなかのモツレをあらわすときの conflict は従来、葛藤と訳されていたが、審議会では抗争とした。しかし、葛藤で差し支えないと考えた。

2) 漢語があまりに難しすぎる時。たとえば、まれに概論書にみられる備給、委員会案の範疇および短絡反応は、索引には採用したが、見出し項目としてはそれぞれ、カセクシス、カテゴリー、近道反応とした。

3) やさし過ぎるアイアイとなり、また、難しすぎるものとやさし過ぎるもの

の混合によって不適当と考えられるとき、たとえば、病的行動としての⑩ Kaufsucht は、委員会案の‘買い癖’のかわりに従来の‘濫買癖’を採用、‘範略的ふるまい’は‘カテゴリー態度’とした。

4) 誤訳または不適当な訳と考えられるときは、慣用の訳語であっても排除した。たとえば、semantic differential については、しばしばみられる‘意味微分’の訳を不適当とみなし、SD法を選び‘意味差判別法’の訳語を付加した。

5) その用語や訳語が狭い範囲の研究者には適当と思われたものでも、ひろい視野でみると不適当と思われるとき、たとえば、paranoia については、委員会案では、妄想症、パラノイア、偏執症の3訳語をあげているが、妄想症だけで差し支えないと主張する者もある。妄想症で差し支えないときも少なくはないが、正常人の性格と結びつけたときに妄想症体質といった言い方は好ましくないので、パラノイアと偏執病を採用した。

外国語は英語を主としたし、英米で用いられていないコトバのみ仏語、独語とした。たとえ、仏、独の学者の言い出したコトバでも一般に英米で通用しているものは英語にした。ただ、むりに英訳すること(たとえばラテン語の pseudologia phantastica を phantastic pseudology などとすること)は避けた。外国語をカナで表わすときには、かならずしも英語読みにはしなかったし(たとえばホーミオスティシスとせず、ホメオスタシス)、むりに英語の正確な発音には近づけようとしなかった(バースナリティをとらずパーソナリティとした)。人名は末尾音節などのあいまい母音や脱落母音は、もとの綴りを推測させるようなカナ書きにしたけれども(トンブスンでなくトンブソン)、一般には、よほど慣用と異ならないかぎり、なるべく本来の読み方に近いものにした(アドラーでなくアードラー、ベルグソンでなくベルクソン)。

1979年10月

宮 城 音 弥

凡 例

見出し

- 1) (現代かなづかい)により、五十音順に配列した。
- 2) 見出し項目に相当する[]内の外国語は、一般に英語のみとし、他の外国語の場合には、㊶(ドイツ語)、㊷(フランス語)、㊸(ラテン語)を付記した。ただしラテン語でも、現在ふつう英語として用いられているものは、㊹(英語)とした場合もあるし、フランス語でも、今日英語として用いられ、フランス語としてあまり用いられていないものは、㊹とはしなかった。

本 文

- 1) ()は、大きな辞典であるならば独立項目として掲げるべきであるが、分量の制約のため、独立項目として掲げるに至らなかったもの。関連する項目中で説明を加えてある。本文に項目として見当らなかった場合は、一応、索引によって検索していただきたい。
- 2) ()は重要な用語や他と区別したいコトバに用い、' 'は引用文、その他強調する文章の場合につかった。
- 3) 外国語の区切りおよび2人の名を合した学説などはハイフン、外国人名の姓と名の間には二重ハイフンを用いた。
例：イデ-フォルス、ヤング-ヘルムホルツ説、スタンレー=ホール
- 4) *はその語が見出し項目として出ていることを示す。
- 5) →は'……の項をみよ'という意味。⇒も同様であるが、同意語であることを示す。
- 6) →は順や系列を示す。 例：刺激→反応

巻末の付録Vには、本文中にカナで記載した欧米の研究者名、およびとくにわが国の概論書などにのせられている欧米の学者名に原綴を付して掲載した(ただし、これは索引にはのせていない)。

ア

INRC群 [① INRC-groupe] → 形式的思考操作期。

アイカメラ [eye camera] 眼運動記録装置。どこに視線がゆくかを測定する。

IQ ⇒ 知能指数。

愛国心 [patriotism] 1) 愛国感情(自然的な国に対する愛情)。2) 自己防衛的爱国欲求(国家に頼り、これに保護を求める気持)。3) 爱国義務(国家に対する奉仕または忠誠の義務)。4) 国家的集団愛(自己の属する社会集団の平和を保ち、これをよくしようとする努力)であるが、その集団として国家を選ぶ場合)。5) 国家的エスノセントリズム*。このようなもののうち、ひとつまたはそれ以上をふくむもの。

アイコニック・サイン [iconic sign] → 記号。

愛情 [love] 他人または他の動物と持ちつ持たれつ生活したいという欲求つまり(共生欲求) (symbiotic need)に伴う感情。相手をかばい、相手に共感する感情をふくむ。恋愛・親子愛・友情はその代表的なものである。愛情に(奪う愛) (① amour captatif) と(悔ける愛) (② amour oblatif) を区別することができる(ビション)。前者は他人に自分を愛させようとするもの、後者は自分をなげ出して他を愛するものであるが、愛はこの両面を多かれ少なかれふくんでいる。なお、フロイト*は自己を愛の対象にするナルチシズム*を語った。(恋愛)は性的欲求から発展しているが、性欲に伴う性的選択(淘汰)は「この相手でなければ」という選択態度を生む。こうして觀念化して性的なものを完全に離れたものが(プラトニック・ラヴ) (platonic love) である。

アイゼンク Eysenck, Hans Jürgen 1916～ドイツ生れのイギリスの心理学者。パーソナリティの実験的研究・統計的研究で知られる。因子分析によってパーソナリティの神経症の次元、内向性・外向性次元を問題にしたし、行動主義的の心理療法の発展にも役割を演じた。著書には Dimensions of personality (1949) 以来パーソナリティに関するものが多い。

アイソ・センシティブィティ・カーヴ [iso-

sensitivity curve] → 信号検出理論。

愛着行動 [attachment behavior] 幼児が周囲の者に接触しようとし(接触反応)、愛されたり、賞められようとする依存的行動。ボウルビーは母親が乳を与えるために、母親への依存が生ずるという考えに反対して、それが一次的で生れつきだとして、この概念を提唱した。動物にもみられる。

アイデンティティ [identity] ⇒ 自我同一性。

あいまいさの寛容 [ambiguity tolerance] はっきりしない事態に当面して感情的に無理な決定をせずにいられず全てを白か黒かと割りきってしまう態度を(あいまいさの不寛容) (intolerance of ambiguity) といい、ファシズムのような非合理主義的な権威主義的態度を説明するために用いられる。このような傾向がなく、むやみな決断をしない性質が(あいまいさの寛容)である。(あいまい耐性)とも訳されるが、物事を明快に割り切る態度をもつ得ぬ非合理主義的態度を示すものと考えられやすいので適当ではない。あいまいさの寛容を測定するために、(イヌ・ネコ・テスト) (dog-cat-test) が考案されたが、これはイヌからネコまで少しずつ移行してゆく絵をみせてイヌかネコかを判断させるものである。

アヴェュロンの野生児 [wild boy of Aveyron] フランスのアヴェュロンの森で見出された野生児で、イターンの研究した例。

アウト・グループ [out-group] → 集団。

アウフガベ [① Aufgabe] (課題)。被験者が実験者から与えられる問題。この場合の被験者の態度、課題の意義を漠然ととくこともある。

アウベルト現象 [Aubert phenomenon] 視野のうちに他に何も無い所で垂直の線をみせ(たとえば暗室で明るいタテの線をみせ)、頭を一方に傾かせると、この線が他方に傾いて見える現象。

アウベルト・フェルスター現象 [Aubert-Förster phenomenon] 近い距離で小さいものを見ると、遠い距離で同じ視角をもつ大きいものを見るとでは、網膜にうつった像の大きさは同じでも、前者のほうがはっきり見えるという現象。

アウラ [aura] (前兆)。テンカン発作直前にみられる症状で、恐れをもつとか、赤い色をみるとか、鼻へかけて鼻くさ臭を感じるなど、さまざまな形のものがあつた。

ルなど)、ミミック(模倣—ものまね)、イリュージョン(めまい—ロドモのぐるぐるまわりなど)を分類した。遊びの説明には、先祖の生活の反復だという説(ホール*)、エネルギーの発散だという説(過剰エネルギー説)(surplus-energy theory)(スパンサー*)、カタルシス*説(フロイト)があり、ロドモの遊びについては、将来の生活の準備(グロース)といったことがあげられている。

アタクシメータ [ataximeter] 〈失調計〉、眼をゆぶらに立ったときの身体のゆれを測る装置。

アチーブメント [achievement] 〈成績〉または「学力」。どのくらい学習しているかの程度。知能の場合と同じように、アチーブメントの年齢指数AQ*を問題にすることがある。これを測定するのがアチーブメント・テスト (achievement test) または「学力検査」。→達成動機。

圧覚 [sense of pressure] →触覚・圧覚。

圧傾斜 [pressure gradient] 皮膚などの一点に圧力を加えるとき、これが、すべての方向に向かかってほしいに減少していくこと。

圧縮 [condensation] メンとかスウィークスのように、2つ以上の像がいくつになつて、内容が縮小してしまう場合、夢や神話や精神分裂病者の絵などにみえる。→膠着、連合。

圧点 [pressure spots] →感電点。

アッハ Ach, Narziss 1871~1946 ドイツの心理学者。医学を学んだが心理心理学を研究。薬物心理学や催眠への興味があったが、その後キルパの指導により意志活動の研究をおこなった。ヴェルワグ心理学派*の重要な人物で、いわゆる「組織的実験的内観法」(①systematisch-experimentelle Selbstbeobachtung)は彼の命名である。決定傾向*の概念は有名であるが、心像の固執・傾向(①fixations-tendenz)という考えも彼が提唱したものである。[主著] Über die Willenstätigkeit und das Denken, 1905; Über die Begriffsbildung, 1921。

アッハ・ヴィゴツキー法 [Ach-Vigotsky method] 概念形成についての研究方法。たとえば、「大きくて重いもの」を gatzun として何回も示すと、だんだんに、この無意味なコトバが、大きくて重い、という意味をもつようになる。

圧搾 [pressure balance] →触覚・圧覚。

アトキニン [atropine] →アトロピン。

動機づけの強度 = $f(\text{動機} \times \text{誘因} \times \text{期待})$ 。この3因子は、たとえば、金うけという動機、目標としての金額、手に入れる確率といったもの。

アート・テスト [art test] 芸術作品をみせて、好き嫌いと思うものを選択させるテスト。

アドラー Adler, Alfred 1870~1937 ウィーンの精神医学者。フロイト*の影響を受け、その協力者であった。性を重視するフロイト説に対して、「力への意志」を人間活動の中心において、個人心理学*なるものを樹立した。ロドモは人生の門出において無力感をもち、この無力感は、第1に、不適当な扱いを受け不幸な環境に育つとき、第2に、つるほど左利き*という(器官劣等性*)—身体の異常について本人が劣等感を感じる場合—によって強められる。このようなときに、他人にすぐれたいという欲求によって、これを克服しようとする。敗北してしまうこと(代償不足)があるが、ドモリだったデモステネスが雄弁家になつたように、補償*過剰がみられることがあると、彼は主張した。[主著] Studie über Mindervertigkeit von Organen, 1907; Über den nervösen Charakter, 1912; Praxis und Theorie der Individualpsychologie, 1919。

アドレナージックス [adrenergic substance] アドレナリン・ノルアドレナリンと同様の効果をもつ物質。

アトレナリン [adrenalin] 副腎から出るホルモンの一種で、怒り、恐れなどの情動に興奮したときに多く分泌されるもので、心臓の動悸(心搏)を強くし、血圧、血糖を高め、瞳孔を拡大させる。

アトロピン [atropine] ナス科植物に含まれる塩基性物質。よく副交感神経に作用して、その作用にブレーキをかけ、脈搏を増加させ、目のなかをからからにし、ヒトミを大きく見せられる。これを注射して副交感神経緊張の有無をしらべる試験がある。

アナグラム [anagram] テストで、キ・ビ・ン・ウ・ヨを並べかえて「キンヨウビ」とさせるような、つづりかえ問題。

アナクリティック [anaclitic] 精神分析のコトバで、生れてすぐ母親または母親に代わる人に愛情をもち、この点に精神的に落ちたかからぬままふたつ歳までこの状態を維持する(①anaclitic phase)の時期をいう。この時期は、乳児の生後2ヶ月から1歳半まで続く。

たり、食欲を失くしたり、眠らなくなったりする)を(アナクリティック・デプレッション)(anacritic depression)という(スピッツ)。→依存性。

アナログ型 [analogue type] コンピュータにデジタル型とアナログ型がある。一般に用いられるのは前者で、ソロバンと同様に、一個ずつ、数に従って数えてゆく。後者は計算尺と同様に、連続的な物理量(長さ・角度や電圧とか)によって演算する。思考方法をこの2つの型に従って分類する人(市川)がある。

アニマ・アニムス ① anima; animus ユングのコトバ。男性の心のうちには心の表面(意識)の男性的傾向と反対に女性的なものが潜んでいる。この女性的な精神を(アニマ)といい、これに対して、女性のもつ無意識的の男性的性格を(アニムス)という。

アニミズム [animism] 原始人やコドモは、動くものは、すべて命または靈魂をもっていると信じている。これをアニミズムという。

アノイヤー [annoyer] 不決な刺激で、これを除こうとする努力をひきおこすもの。ゾーンダイク*のコトバ。

アノマロスコブ [anomaloscope] 色弱・色盲の鑑別器械。

アノミー ① [anomie] 1) 社会的規範*がこわれて、社会が無統制になった状態。デュルケム*のコトバ。2) 物名失語症。

アーノルド・リンズレー説 [Arnold-Lindsley theory] →情動。

アブサンス [absence] (欠神)。てんかん発作の一つの型で、意識や思考が一瞬中断するもの。眼球が上方に転じたり、マブタがびくびくする以外に筋肉のケイレンを伴わない。

アブニーの法則 [Abney's law] 光度のちがうものを混合したときの明るさは、それら光度の和の明るさに等しい、という法則。

アポロ型 [Apollonian type] ギリシャ神話の神アポロのように静かで調和的なタイプで、激しく破壊的な神のディオニソスの性格に対するもの。ニーチェのこの分類をベネディクトは文化の型の分類に採用した。→ディオニソス的文化。

アポロ的文化 [Apollonian culture] →ディオニソス的文化。

甘え 日本人の性格を説明するための土居健郎のコトバ。愛嬌の土合たる共生欲求は願ひ、願もれないという欲求であり、もちつ、もたれつとの欲求であるが、願ひたい、もたれ

たいという側面を強調したもの。フランス語の gâté, câlin に相当するし、とくに韓国語にはオリグワン、オンソクなどといったコトバがあるが(李御寧)、英語にはないということから日本特有と考えられた。

アミタール面接 [amytal interview] →麻酔分析。

アメンチア ① [Amentia] 中毒や伝染病の場合などにみられる意識の濁った状態で、この場合、知覚・注意・記憶など精神機能は全く失われ、いま自分がどこにいるかという感じ(見当惑*)がなくなる。知的の働きはほか、意志や感情が減弱する所からこのコトバがある(a-失う, mens 精神。痴呆はこれに対して dementia, de- 離れる)。フランス学派の(精神錯乱*)と同じ。(譫妄*)状態は同様な場合にあらわれるが、非現実的な夢のような状態であって、夢幻状態*とも称せられる。なお、英語の amentia は精神薄弱*とくに白痴*をさす。

アモック [amok] マレー特有の精神異常。興奮して凶暴となり、殺人を犯し、あとでその間のことをおぼえていない。

争い [rivalry] 衝突(conflict)の昇華した形。衝突は相手の全面的否定(相手を殺すこと)であったが、ゲームの規則によって形をかせ、論争・裁判などの形をとるようになった。競争*のうち、(競い)は相手への働きかけのない場合で、(争い)はフットボールの試合に、(競い)はランニングに対比される。

あらわな行動 [overt behavior, explicit behavior] 頭のなかで考えている場合の思考とか心のなかで感じている感情とかいうような(かくれた行動)(implicit behavior, covert behavior)に対して、歩行・発声・表情など外部に現われた行動をいう。

アリストテレスの錯覚 [Aristotle's illusion] 片手のナカ指とヒトサシ指を交差させ、その間に小さい玉をおくと、目をつぶった場合には、これが2個あると感ずる錯覚*。

REM 期 [REM phase] 述説睡眠*と同じ。この時期には急速な眼球運動が生ずるので、急速(rapid, 眼球(eye), 運動(movement)の3語の頭文字をとって REM 期という。

アルヴァックス Halbwachs, Maurice 1877~1944 フランスの社会学者でデュルケム学派に属する。自殺論(自殺の原因, Les causes de suicide, 1930)、記憶論(記憶の社会的プラ, Les cadres sociaux de la mémoire, 1925)などを、彼の心象論の中心をなす。第

二次大戦中ナチに殺された。

RNA [ribonucleic acid] リボ核酸。核酸の一種で、すべての細胞の核、細胞質などに存在し、遺伝に関係をもつ(遺伝の暗号をつぎの世代に伝えてゆく)DNAに対して、RNAはタンパク質を形成するアミノ酸の配列の順序をきめる。記憶をRNAに関係づけて説明しようとする試みがある(RNAの合成を妨害すると、ネズミの学習がうまくいかない)。

ROCカーブ [receiver operating characteristic curve] →信号検出理論。

R型 →道具的条件づけ。

アルカッド-テスト [Alcadd test] →アルコール中毒。

アルゴメータ [algometer] (痛覚計)。ドロマータ*とちがって簡単なもので、皮膚にあてて力を加え、それに応じて増加する目盛りを読むもの。

アルゴラギニア [algolagnia] 相手に苦痛を与え、または与えられて性的満足を得るもの。サディズム*とマゾヒズム*。

アルゴリズム [algorithm] 数学における算法であるが、考え方の定式をもいう。学習指導の手段とされる。

アルコール中毒 [alcoholism] アルコール飲料をのみすぎたために起こる病的な状態。これを(急性酩酊)、(病的酩酊)および(慢性アルコール中毒)に区別することができる。急性酩酊(急性アルコール中毒)は、ふつうの酔った状態。病的酩酊は、ある種の素質をもった人が、酔って朦朧状態に近い状態となり、怒って乱暴を行ない、後になってその間のことをほとんどおぼえていないもの。慢性アルコール中毒は、アルコールなしでは禁断症状を示す(アルコール嗜癖)(alcohol addiction)の結果である。身体症状としては、手がふるえ、消化器・肝臓・腎臓などさまざまな内臓の障害や神経炎を生ずる。テンカン発作をおこす場合もある。精神的には高等の感情が鈍麻し、表面的には調子がいいが、実際は荒々しく、仕事を怠り、家族を無視し、ウソをついたり、無責任になったりする。性的インポテンツになることが多いが、性欲は減退せず、少女暴行や露出症*を示すことがある。嫉妬妄想*をもつことが多い。慢性アルコール中毒を土台として現われる急性の障害として(朦朧酩酊妄(急性))および(アルコール幻覚症)(alcoholic hallucinosis)または(急性幻覚

症)(acute hallucinosis)がある。慢性アルコール中毒のために、かなりひどく神経系統がおかされたときは(コルサコフ症候群*)(見当惑が失われ、記憶が障害され、口から出まかせをいう)を示し、(コルサコフ精神病)(Korsakow's psychosis)とよばれる。アルコール中毒の傾向を測るテストとして、アルコール常用テスト、(アルカッド-テスト)(Alcadd test=alcohol addiction test)が提唱されている(マンソン)。なお、alcoholismに常用・依存・嗜癖をふくめることがあるが、この場合(アルコール症)の訳が適当。

アルツハイマー病 [Alzheimer's disease]

→老年痴呆。

Rテクニク [R technique] (R相関)(R correlation)。2つの精神機能、2つのテストの問題が、どの程度類似し、相関関係をもっているかをきめる方法であり、それを土台にした因子分析法である。n個の測定値(たとえば、何種類かのテストを行なった結果)の間に存在する共通因子を推定するために、2つずつとり出したすべての組合せについて(n×n次の)相関行列をつくって因子分析をするもの。→Qテクニク、Pテクニク。

アルファ運動 [alpha movement] →みかけの運動。

アルファ検査 [alpha-test] →A式検査。

アルファ波 [alpha wave] →脳波。

アルファ波阻止 [alpha-blocking] →アルファ波抑圧。

アルファ波抑圧 [alpha-attenuation] 脳波のうちα波はオトナの心身の平靜な時にみられるものであるが、眼をひらいて視覚刺激が入ったり、注意を集中したり、考えたりすると、振幅がいちじるしく減って、β波のような波(低振幅速波)がふえる。この現象をいう。α波阻止(α-blocking)ともいわれた。

アルファ、ベータ、ガンマ仮説 [Alpha, Beta, Gamma hypothesis] 反復することが学習に対して、どんな影響を与えるかということに関して3つの可能性を考えることができる。学習を促進するか(アルファ)、何の影響も与えないか(ベータ)、学習を妨害するか(ガンマ)である。ゲンラップによる。

アルベド知覚 [albedo perception] うす暗い所で白紙をみると、ほんとうは暗灰色であるのに、まっ白にみえる。恒常性*の一例(アルベドは白さ)。

アルベロニチズム [albinism] (白化病)

エロティズム)《他者色情》。オートエロティズムに対して、もつうの性欲のように、他人に向けられるもの。

暗記学習 [rote learning] 記憶の実験で、意味を考えないで機械的な棒暗記をする学習。

暗示 [suggestion] 感覚・観念・意図などが、コトバなどのシンボルによって、理性に訴えることなくして他人に伝達される現象をいう。コトバ(表面にあらわれない内言語をふくめて)が刺激となって観念が実現する場合だけが暗示である。暗示は社会生活で大きな力となっているが、意志減弱状態では《被暗示性》(suggestibility)がたかまる。群集心理*の場合にはとくに著しい。いわゆるヒステリー*を、バビンスキー*は暗示によるものと考えた。その他、暗示性の極度の高進は、精神分裂病の緊張型、アルコール中毒*の振盪譫妄(躁狂)などにみられる。[暗示と条件反射] 胃ケイレンのときモルヒネを注射すると痛みがとまるが、水を注射しても痛みがとまることがある。もし以前にモルヒネで痛みがとまったために(これは無条件反射)、これと同時に与えられた注射による感覚によっても痛みがとまったとすれば、これは条件反射である。これに反して、痛みがとまるという観念が働いて痛みがとまったとすれば、これは暗示である。もちろん、暗示を条件反射とみなす者もある。前の暗示効果をなくすための暗示は「反対暗示」(counter suggestion)。

暗示症 [⑩ pithiatisme] バビンスキー*のコトバで、ヒステリー*のこと。

暗順応 [dark adaptation] 明るい所から暗い所へ行ったとき、最初は物が見えないのに、しだいに見えてくる現象。→順応。

安全 [security] 欲求の満足が保証されている状態、または自信を喪失しない状態。アードラー*では、争わずに権力をもち得る場合をいう。

アンダー・アチーヴァー [under-achiever] 《学業不振児》。知能に比べて学業成績の悪い者。これに対立するのが(オーヴァー・アチーヴァー)。

安定検査器 [steadiness tester] 指や手がふらつかない程度をテストするもの。被験者に、メトロノームの拍子にあわせて、つきつぎと金属製の針を、まわりの金属板に触れぬように穴にさしこませる。金属板にふれた回数が自動的に記録される。

安定係数 [coefficient of stability] 測定

や検定を2回行ない、その2回の結果の相関を計算したもの。テストの場合の信頼度係数と同じ。2回とも同じ形のテスト(→折半信頼度)の場合にこのコトバを用いる人があるが、これは正確には《安定等価係数》(coefficient of stability and equivalence)である。

暗点化 [scotomisation] 自我を防衛するために、事実を否定すること。現実には存在する事実が感情の影響で見えなくなり、暗点が生ずるので、そうよぶ。

アンドロマニア [andromania] ニンフマニアに同じ。→色情狂。

アンラゲ [① Anlage] 先天的の性質であって、胚種のうちにすでに存在すると考えられるもの。遺伝的性質ばかりでなく、胚種が何らかの原因によって影響されて生ずる性質をふくめる。→氣質、パーソナリティ、体質、素質。

イ

言いまちがい [④ ⑤ lapsus linguae, ⑥ slip of the tongue, ⑦ Versprechen] 無知や発音の障害でなくて、まちがったコトバを話すこと。(逆転) [⑧ Vortäuschungen. 前後のコトバの(交換)], (前置) [⑨ Antizipationen. うしろのコトバを前におく], (後置) [⑩ Postpositionen. 前のコトバを後におく], (混成) [⑪ Kontaminationen. 2つのコトバの混ぜ合せ], (置換) [⑫ Substitutionen. 別のコトバを使う]に分類されたが、フロイトは、とくに(混成)と(置換)においては意識下の原因によるものを重視すべきものとした。→歪曲行為。

ESP (遠隔認知・透視・感覚器官を通じて、刺激を感ずること。遠隔感応すなわち、テレパシーを含めて GESP(Gは general) または遠感ということがある。ラインが、壁の向うがわでカードをだして、こちらでそれに描かれている図形(☆□△○)を記したカード)をあてる実験その他を行ない、統計的に処理し、この事実を認めることができるとして、これを感官外知覚(extra-sensory perception)とよび、その頭文字をとって ESP とした。

イェーツの修正 [Yates correction] カイ二乗検定*の公式を修正したもの。→(付録 IV)

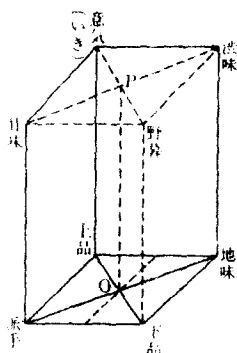
イエンスシュ Jaensch, Erich Rudolf 1883

～1940 ドイツの心理学者、実験現象学により知覚を研究し、直観像*を発表した。また、人間のタイプを(統合型)と(非統合型)に分けた。

異化 [dissimilation] 1)生物はとり入れた物質を同化するが、これと反対の分解作用。2)知覚の対比のように、反対のものがあるために、かえってちがいがきわだつこと。3)子どもが現実を精神に似たものとする同化に対して、自分と現実を分化すること(ピアジェ*)。4)外界に働きかけ、これを適応のために変化させる同化に対して、環境に支配されて自我をかえること(ユング)。

怒り [anger] リボー*は、欲求の満足をきとげざるものに対して、苦痛をなえようとする衝動と定義した。彼は文明人の怒りは進化の結果として、進化を3段階にわけた。1)動物型—実際の攻撃を行なうもの。2)感情型—攻撃があらわになっていないもの。3)知性型—理性によって抑制され、復讐に最もよい条件を考えるもの。怒りが攻撃と結びついたものであることは、怒りが闘争本能に伴うとのべたマクドナーガル*にもあらわれているし、欲求の満足をきまげられたとき攻撃的になることは、デンボウの研究(解決できぬ問題を与えて、怒りの発作をおこさせる)や(欲求不満・攻撃説)にもみられる(→攻撃性)。怒りに伴ってアドレナリンとノルアドレナリンが分泌するが、これが、恐れの場合にアドレナリンの分泌だけがみられるのと異なっており、筋緊張増加、心臓拡張期の血圧上昇などを示すものと考えられる。

いき 日本文化のうちにみられる特殊な感情体験で、性的魅力が江戸時代の文化的・社会的な条件によって形を変え昇華したものと、九鬼周造は主張した。彼は、この文化的条件が武士道の理想主義と仏教の(あきらめ)に関係があるとし、あかぬけして(誼)張りのある(意気地)色っぽさ(媚態)が(いき)だとのべ、(いき)に似たコトバをつぎのような直六面体によって図示した。底面は人間性一般に関係するもの、上面は異性に関係する性質を示す。また、意気—野暮—下品—上品という面は、物とか人間それ自身の性質を「よいわるい」という価値判断の立場からきめたもの、甘味—淡味—地味—派手という面は、他に対する性質を示すもの。[いきとそれに類似したものちがいがい] いろいろさ(①coquet)は図の



上面のうち、意気—甘味に寄った半分、①chicは意気—上品の線をぼんやり意味し、②raffinéは意気—淡味—地味—上品の面で、意気—淡味寄りの部分で示される。

閾 (v) [threshold, limen] 刺激は、ある強さ以上になって初めて知覚され、または反応をおこすが、この境目にある知覚・反応、またはその場合の刺激量を閾という。すなわち、(感覚閾)(threshold of sensation)とか(反応閾)(threshold of reaction)というように、最小の感覚や反応をさすし、また、(刺激閾)(stimulus threshold)とよんで、このような感覚や反応をおこす最小の刺激をさす。いままでよりある程度明るさが増したとき、われわれは明るさの差を感じるが、このように、感覚に差を生ずるための最小の差異を(弁別閾)(差異閾、識別閾)とよび、また(最小可知差異)ともいう。感覚閾は厳密に一定した点ではなく、刺激を減らしていった感覚しなくなる場合の閾値と、感じない程度の刺激をだいに増加していった感覚を初めて生ずる場合の閾値は同じではない。また、さまざまな条件で変化し、疲労などは閾を高め、緊張や注意集中の状態では閾は下がる。暗闇のなかにおかれると、5分位の間に明るさを感じる閾は急激に低下する(→暗順応)。感情的条件により閾が変化することも問題になっているし、神経には固有な動揺があるから、閾はたえず狭い範囲で変化している。閾は、従来、光とか音などの単純な感覚についてよく研究されてきたが、最近の心理学の実験では単語とか図形・文字・音声などを刺激として使ったこともあり、このような場合をふくめたときは、(認知閾)(cognition threshold)というコトバ

を使うこともある(このような認知関は単純な感覚の刺激関よりも高く、たとえば、ただ何かが見えるという場合よりも明るさを強くしなければ、'三角形だ' '机という字だ' という認知はできない)。

閾下 [subliminal, ⑤ infraliminaire] 気づかれない、意識されない状態を示すコトバで、'閾(limen)より下' という意味。閾下刺激とは、刺激関よりも弱い刺激をいう。閾下刺激によって生ずる知覚(閾下知覚: subliminal perception, subception)は長い間その存在を信じられなかったが、多くの実験によって、今日その存在が主張されるに至った。

生きがい 生きかたを土台にして個人が選択するもので、生きがいとする対象(コドモを生きがいとする人にとってのコドモ)、生きがい感、生きがい欲求の3者のうちの一つ、または、いくつかをさす。しかし、生きがいによって生きかたがちがうというように、生きがいと生きかたは密接な関連をもつ。シュブランガーの(生の諸形式)は、生きかたの形式の一つの見方である。→シュブランガー。

生きかた [way of life] ひろくは貧乏ゆえにみじめな生きかたをするといったように、強制されたものにも用いるが、一般にはキリスト教的罪悪感をもつ生きかた、というように文化による価値観に支配された個々の生活様式をいう。大別すると、自然に働きかけ理想を求める追求人の生きかた、その反対の無執着人的生きかた、極端な場合には禁欲主義を示す義務人的生きかた、その反対の享樂人的生きかた、危険をあえてする冒險人的生きかた、その反対の逃避人的生きかたがあり、また多くの人のうちに存在している自然人的生きかた(自然的欲求を求め、社会生活を楽しむ)がある。



閾刺激 [liminal stimulus] 感覚を生ずる最小の刺激。→刺激関。

畏敬(!!) [awe] 'おそれ多い' という感情で、尊敬と恐怖の混合したもの。(崇敬(reverence)とは尊敬の含まれている点で異なる)。

意志 [volition] 態度を言語で言い表わしたものである。態度は行動への(潜在的な、つまり行動を促してしまふ)傾向であるが、意見

はその言語的表現である。したがって、'コドモをかわいがる態度' とはいわぬが、'コドモをかわいがる意見' といわぬ。→世論。

移行学習 [shift learning] 一つの弁別問題を学習したのちに、すべての弁別問題を学習すること。たとえば、②のほうに行けばエサがあり、③に行けば電気ショックをうけるような実験でネズミに弁別学習を行ない、つぎに、先とは逆に③に行くと電気ショックをうけ、②に行くとエサを与えるような弁別学習を行なう(逆転移行) reversal shift)とか、色のちがった刺激に大小の差をつくってにおいて、色に關係なく、大きい図形と小さい図形の弁別を行なわせる(非逆転移行) non reversal shift)とかする学習。同様の実験はコドモの概念学習にも用いられる。

意志・意思 [will] 意志というコトバは、広い意味から狭い意味までさまざまに用いられる。次の1)~3)の場合は(意思)と書かれることが多い。1)[狭義] 遊びたくもあるが、勉強しなくてはならないから勉強するというように、義務感を伴うとき、これはクラバレードが'2つの傾向の葛藤によって一時的に停止した行為を、高級な傾向に優先権を与えて再適応する機能'と定義した場合である。2)[比較的狭義] 遊びにゆくべきか勉強すべきかを考えたあげく、散歩しようとする場合、義務感はないが、選択を行なっている。このように、選択判断がある場合を意志という。3)[中間的定義] ある観念をもち、これにしたがって行動すること。あらかじめもっている観念は、ジェームズ*のいう『予備観念』(preparatory idea)である。4)[広義] 生の意志。目的に向けられた活動で、動物も胎児もこの意味の意志をもつ。(有意的)(voluntary)という形容詞は、ふつう広義の意志の場合には用いられない。意志を説明するために、これを、欲望に帰する説(コンディヤック)、感情の延長とみる説(ヴント*)、知的判断と同視する説(プラトン・アリストテレス・デカルト)、他に還元できぬ主体的なものとする説(ジェームズ)、反射と同じものである説(リボー)、社会を離れて意志は考えられぬという説(ブロンデル)がある。[意志の障害] 意志の障害には、まずヒポブリア*(hypobulia、意志減弱)がある。社会的なブレーキがなくすぐに目的を達しようとする近遠反応*、願望を合理的な方法を用いずに満足しようとするメテデー*願望などは

この例である。さらに、意志活動が完全になくなるのが無意志*(アブリア)である。意志の方向が病的な場合を(意志歪曲)(パラブリア *parabulia*)とよぶことがあるが、これは強迫観念*・病的恐怖・衝動強迫などを示す精神衰弱*の場合の意志である。なお、精神分裂病の拒絶症*とか、躁病の(作業心迫)(① *Tatendrang*)つまり仕事をやってゆかずにいらねぬ状態を(意志過剰)(ヒペルブリア *hyperbulia*)というが、このような表現は適当でない。広義の場合をのぞけば、意志は社会的なものであるし、プロイラーのいうように人間は健康であればあるほど意志が強いものだからである。【他のコトバとのちがいが】(意欲)または(執意)(*volition*)は意志の働き(過程)。知性に対する知的活動のように、意志は性質で(これを能力と考えた時代もある)、意欲は意志活動。(意図*)(① *Vorsatz*)は、適当な機会がくるまで実行を保留しておく概念。(志向)(*intention*)は意志的に決められた動機。フランス語の *intention* は、英語の *purpose* と同じく、目的をもつ行動(広義の意志)をすべてさす。

意識 [consciousness] 1) [自発的意識] 私には今やっていることが自分で分かっている。この場合、私は意識をもっているという。すなわち、'自分自身の精神状態の直観'を意識という。心理学や精神医学で第1に用いられるのは、この意味であって、'意識を失った'というのは、このような直観がなくなって、自分が今何をしているかが分からなくなること。2) [対象意識] 私は目前にある本を認知している。このとき私は本を意識しているという。何ものかを知ること意識といい、無我の境地にいる場合は意識がないという。この(対象意識)(*object-consciousness*)は、次の反省意識にふくめられることもある。3) [反省意識] 自分自身をたんに直観しているばかりでなく、'こんなことをいって果して相手を怒らせないだろうか'ということを考える場合のように、自分の精神状態を注意して表現するときに意識があるという。自己反省のないときは意識がなかったといわれる。4) [精神] ブロンドル*が(病態意識)(① *conscience morbide*)という場合の意識はこれである。意識はこうに多くの意味をもっているが、これらを総合して、'現在の瞬間における精神生活の全体'(ヤスバース*)とすることもできなくはない。しかし、この精神生活は外から観察した

ものでなく内面的の体験であるから、やはり、第1の意味に用いるべきであろう。この意味の意識は舞台にたとえられ、その中心のスポットライトをあてられている所は(意識の焦点)(*focus of consciousness*)とよばれ、それをとらまく、いくぶん明るい場所は(意識野)または(意識の視野)(*field of consciousness*)と称せられる。

意志気質検査 [will-temperament test] → 性格検査。

意識障害 [① *Bewußtseinsstörungen*] 意識障害には(せばまること)、(くもること)、(にごること)、(かわること)がある。(意識のせばまり)または(意識狭縮)(意識狭窄)(① *Bewußtseinsverengung*)は、舞台の上で、見える範囲が狭くなるような場合で、ジャネ*はこれをヒステリー*の特徴とした。(意識のくもり)または(意識暗化)、(昏蒙)または(昏伏)(① *Benommenheit*)は、夢のない睡眠から昏睡*にいたる状態で、つぎの(にごり)の場合のように新しいものが出現することがなく、ただ舞台全体が暗くなるように意識の明るさがなくなるだけである。これには(傾眠)、(睡眠、暗眠)(① *Schlafsucht*)を通して、(昏眠)(*sopor*)および(昏睡)にいたる段階がある。(意識のにごり)または(意識混濁)(① *Bewußtseinsstörung*)は精神内部がバラバラになって夢のような状態が出てくるもので、精神錯乱*またはアメンチア*(精神の統一を失うもの)と夢幻状態*または譫妄(①)状態(非現実的な世界に入りこむもの)の2つの型がある。上の例でいえば、興奮した観客が舞台のうえに上がって混乱するようなものといえるかも知れない。(意識のかわり)または(意識変容)(① *Bewußtseinsveränderung*)は、ふつうの意識と全く別の意識が出てくるのであって、回り舞台でシーンが変わるようなものである。意識状態*や二重人格などの場合であって、秩序のとれた行動をするのであるが、むしろ日常の意識とはちがったものである。意識障害には以上の種類があるが、一般に見当惑*がなくなって、今どこにいるか分からず、あとになってその間の記憶が存在しない。

意識性 [① *Bewußtheit*] われわれが物を思い浮かぶときは心像*があらわれるのであって、実物ほどはつきりしないが感覚的性質が伴っている。ところが、考える場合にいつも心像があるわけではなく、無心無慮*もある。このような無心無慮思考の場合にあらわ

れる意識状態を、アッハ*は意識性とよんだ。
「意識性」(① Bewußtseinslage) (マル・ス)はその
一形式で、奇異感・満足感のようなボンヤリ
とした体験。

意識の周辺 [fringe of consciousness] 意識
野の中心(注意の焦点)でなく、十分に意識さ
れていない領域。ほゞやり意識しているもの
を示すためにマリ・ス*によって導入され、
ジェームス*によって用いられた。フロイト*
の「前意識」はこれに近いが、これは「その瞬
間には意識されていないが意識されるもの」
であるから、ほゞやり意識されていること
を示すこのコトバとは意味がちがう。

意識の流れ [stream of consciousness] 意
識の連続を強調したコトバ。ジェームス*に
よる。

意志喪失 [abulia] ⇒無意志。

異常 [abnormal] 1) 平均から離れている
こと。この場合、100歳以上まで生きる人
病人と同様に異常であり、ムシバが全くない
人は平均から離れているから異常である。心
理的にも同様であって、知能が平均的の人間
は正常、ひどく劣ったり、すぐれたりしてい
る者は異常である。2) 異常を、理想または価
値から考えて、定義することができ、ムシバ
が全くない人間は、けっして異常ではない。
同様に、天才的創造は異常ではない。ふつう、
異常心理学や精神医学で用いている「異常」の
概念は、この第2の意味である。「偏異」(aber-
ration)も同じ。なお、逸脱*は社会的、倫理
的規範から離れること。

異常触感 [paresthesia] ⇒パレステジー。

異常心理学 [abnormal psychology, ① psy-
chologie pathologique] 異常者を対象とする
心理学。正常心理学と同じ方法を用い、精神
医学と同じ対象を扱う心理学の部門といっ
てよい。犯罪者問題等は精神医学にも、異常心
理学でも扱う。ふつうの人間に経験する特
別の状態である夢なども同様である。しかし
ながら、異常心理学は医学の一部門とする精
神医学とは目的がちがう。したがって、精神
医学のうち「精神症状学」(mental symptomato-
logy)は、異常心理学とほとんど重なり合っ
たものであるが、精神医学の目的にしたがっ
て、いくぶん方向がちがうところになり傾向が
ある。異常心理学の方法には、精神医学的
(疾病学的)分類(精神分裂病とか躁鬱病とか
いう分類)を基礎とする立場(伝統的医学学
派)と、これを全く問題にしないで症状が精

神的にどのようにでき生がってきたかとい
うことを論ずるサイナミックな立場(フロイト*
など)、幻覚とか妄想とかの病的症状を記述
する立場(多くのワグネル学派)がある。

異常性欲 [abnormal sexuality] (性欲*)が
正常でない場合をつぎの4種に分類することが
できる。a) 性欲の強すぎる場合(性的セー
ルエスタシヤ) (① hyperaesthesia sexualis)。
→色情狂。b) 性欲の減退または消失する場合
(生理的原因によるもの、心理的原因による性
的冷感症)。c) 性対象の異常、すなわち(性対
象倒錯) (inversion) (同性愛*・幼児愛*・獣姦*
など、オトナの異性を対象としない場合)。
d) 性目的の異常、すなわち(性行為倒錯) (per-
version) (相手を虐待しなければ性欲を感じ
ないサディズム、相手にいじめられないと性
欲を感じないマゾヒズム*、相手の身体をみる
ことで性的興奮をするスコポフィリー*、性器
をなめてのみ性的快感をもつ(フェニリングス
) (① cunnilingus) など、性行為の手段が目
的となるもの)。なお、フェティシズム*、す
なわちハンケチとか毛皮に性的興奮を感じる
ように、物に対して性欲を感じる場合はc)。
d) 両方の要素をもつ。→口陰性交。

異性愛 [heterosexuality] 同性愛にたいし
て、異性にたいする性愛。精神的な関係につ
いても肉体的な場合についてもいう。

位相心理学 [topological psychology] ⇒
トポロジー心理学。

位相連鎖説 [phase sequence theory] ヘル
プの説で、行動・意識の際の神経の働きは細
胞集成体(機能の上でのニューロンの集団)が
つぎつぎに活動してゆくというもの。

イソモルフィズム [isomorphism] 同型
論。ケーラーは、感じられた物理現象と脳
髓の生理現象、たとえば目についたものと
脳髓の現象の同じ構造をもっていることを主
張した。この同一性の原理または同一性
(同型)をイソモルフィズム (iso-同, morphe
形)とよんだ。(外界と認識の間の類似性)と
いう形而上学説の新しい形式。

依存性 [dependency] 他人に頼ることを
思い、接触し養われることに満足を感じる傾
向。母親が乳を分るることからコッセルの母親
への依存欲求が生ずるを考ふる人(フランク
ス)があり、母の声など知覚による交渉からそれ
を身につけるという者があふ(ワグネルズ)。
生れつきだという説(オットー・ネーグ)
ネーグの病的依存性(病態bid dependency)

は強い人に完全に服従しないではいられない強迫的要因をもつ態度。なお、依存性というコトバは、タバコがやめられないというような薬物依存*の場合にも用いられる。→アナクリティック。

位置感覚 [① Lagesinn] → 深部感覚。

一元配置法 [one way layout] 年齢による記憶力の差をみようとして実験を行なおうとしても、男か女かということや、学歴や職業などの因子が入り込んでくる。この際、年齢という因子だけを考え、それ以外の因子は、まったくランダム(無作為)にるといった実験計画法。男女別、学歴別、職業別の各平均値は等しく、年齢別の平均値だけがちがっていることを検定すればよい。

一試行学習 [one trial learning] 1回試みただけで完成する学習。

一次的過程 [primary process] 精神分析*のコトバで、快を求め不快を避ける(快楽原則*)にしたがう本能的願望の満足を求める過程。幼児にみられるが、その後、に現実に対応する(現実原則にしたがう)(二次的過程)(secondary process)が発達する。

一次的記憶 [primary memory] あるものを経験した直後にもつその体験の記憶。(記憶残像)(memory afterimage)として、短期記憶とそれをもつまでの過程をいう。

一次的機能 [primary function] 現在、直接経験するもので、以前の経験の影響のない場合の機能。二次的機能*に対立するものである。

一次的注意 [primary attention] 無意志的・自発的・消極的な注意。これに反して意志的のものは二次的注意という(ティチナー*)。

一次的ナルチズム [primary narcissism] → ナルチズム。

位置習性 [position habit] 動物がどちらに行くべきかといった選択に際して、いつも同じ側(右なら右)を選ぶこと。自然にそのような傾向をしめす場合のほか、最近では習慣づけられてそのような選択をすることをさす。

移調性 [transposability] メロディーを1オクターブ高いところで演奏しても、同じメロディーである。このように、個々の要素はかわっても全体的構造がかわらないことをいう。音楽の移調からきたコトバで、エーレンフェルスは、要素の総和以上の性質を形態質*となづけたが、要素があってもこの形態質が残ることを形態質とよび、ゲシュタ

ルト心理学の根本的な考え方を導いたのである。

一括練習 [massed practice] → 練習。

逸脱・逸脱集団 [deviancy; deviant group] その行動が社会的規範に反し、道徳に反するとき、逸脱という。異常のうち反価値的ともなされるもので、犯罪・非行・麻薬依存・アルコール中毒・犯罪・浮浪・自殺など。(逸脱集団)は反社会的集団と同じ。→反社会的集団。

一致係数 [coefficient of concordance] 何人かの人(たとえば成績なり性格なりについて)判定を行なって順位をきめたとき、これらがどのくらい一致しているかを示す係数。Wで示し、W=0だと判定はまったくバラバラで、W=1だと完全に一致することになる。→(付録IV)

一致点 [identical points] → 両眼視。

一対比較法 [method of paired comparison] 色の好悪や物事の印象など、主観的な判断を要するものをしらべるとき、二つの組合せ(色の好悪ならば、アカとミドリ、キとアオなど)を多くつくって比較判断させる方法。→印象法。

一般因子 [general factor] → 因子分析。

一般化 [generalization] 判断において、全体に共通したものに到達する過程。generalizationは(条件づけ)の場合は(転化)と訳す。

一般化された他者 [generalized other] ミードのコトバ。自分というものに対する他人というもので、自分がこう行動するだろうと期待している世間の眼をいう。人間はコドモのときから母親・先生・友人などの他人の自分に対する態度をみて、他人の自分に対する役割*を知り、他人というものを心のなかに置いて(他者の眼を通して自分自身をみて)自我をつくってゆく。このようにわれわれが心のなかにもっている(個々の具体的な人物でなく)概念的な他者をさす。

一般心理学 [general psychology] 物理学や化学では、この「酸素」「あの」アルコールを問題とせず、どの酸素にも、どのアルコールにも適用する性質や法則を問題にするが、心理学でも、感覚と刺激の関係の法則とか記憶の現象とかいうように、個人個人を考えに入れず一般的なものを探る分野がある。これが一般心理学である。個人間の差を研究する(個性心理学)または(差異心理学)に対するものと考えられているが、これらも一般的

ものと比較しつつ個人を扱うのであって、厳密に言えば、一般心理学は純粋の個人を扱う(パーソナリティ心理学)(psychology of personality)に対するものというべきである。

一般知能 [general intelligence] → 知能。

一般適応症候群 [general adaptation syndrome] → ストレス。

逸話的記述 [anecdotal record] 自然に観察されたものの具体的記述。

イディオ・サヴァン [⑩ idiot savant] (特異精薄) (異才)。精神薄弱でありながら、絵がうまくとか計算が上手とかいうように、特殊の才能をもつもの。コドモの場合には(特異児童)とよばれる。→ 天才。

イデオロギー [ideology] 1) 観念、その性質、法則などを研究する学問(ド=トラシー)、したがって心理学をさすと考えてよい。2) マルクスは、唯物史観の見地になって、道徳・芸術・学問など社会の上部構造の内容をこのコトバでよんだ(社会的意識形態)。アナーキズム、マルクス主義などはすべてイデオロギーである。マルクスでは階級の対立がイデオロギーを決定すると考えられているのに対し、マンハイムなどのイデオロギーにはこのような階級性が除かれているが、イデオロギーの意味は同じ。唯物史観をみとめながら、イデオロギーが生産力・生産関係の現在の段階に対応するばかりでなく、予見の場合、すなわち将来の生産力に対応したものであり得ることを主張したのは、ワロン*である。これに対して、イデオロギーが人間を統御する時代は終わったとして(イデオロギーの終焉(終焉)) (ベル)を語るような場合には、このコトバは科学と質を異にする信念を意味する。

イデオールス [⑩ idée-force] フイエのコトバで、観念が力をもっていることを示すコトバ。たとえばヒステリーでは、手が上にあがらなくなるという自己暗示によってこの観念が実現して患者は手をあげられなくなるが、この場合、暗示的観念は純粋な観念そのものでなく、力学的性質をもった観念、つまりイデオールスである。彼は、観念だけで精神現象に影響を与えること、観念は一つの行為で(感情)とか(欲求)とかと分離できぬことを主張したのであって、これは今日の動機づけの考えの失墜である。

遺伝と環境 [heredity and environment]

かつては遺伝的素因と環境的素因が独立に存在していて、人間の性格・行動はこれら2つ

の条件を加えたものと考えられたが、実際には遺伝的条件があるために環境が環境としての意味をもち(遺伝的の精薄にとっては、家庭内に書物が多く学問的な会話が交わされていても、学問的環境があるとはいえないし、積極的に頭のよい遺伝的素質がある者は、みずから学問的な環境をつくってゆく場合もある)、環境があるために遺伝的素質の存否が明らかにされるのであって、今日では、シュテルン*の(協合説)または(輻輳説) (⑩ Konvergenztheorie)の主張のように、遺伝+環境ではなく、遺伝×環境(遺伝的条件がなくて、環境だけでは、その結果はゼロである)とみなされている。しかし、これらの各々がどの程度に重要かを明らかにすることは不可能ではない。これをきめる方法として、家庭環境などの報告から主観的に評価する方法や、ある性質についての親子の類似の程度(相関)を求める方法、育った環境のちがう同胞についての比較など、さまざまな方法が用いられたが、今日では(双生児法*)が用いられることが多い。片われ同士が同じ遺伝的素質をもつとみなされる一卵性双生児と、片われ同士が兄弟と同じ程度の遺伝関係をもつ二卵性双生児(ともに片われ同士が同じ環境に育っている)を比べて、どの程度に遺伝的か、どの程度に環境的かをきめる。前者で片われ同士が一致し、同時に後者で不一致を示すときは、遺伝の役割が大きい。すなわち、環境の影響の程度は、(一卵性双生児の片われ同士の差)÷(二卵性双生児の片われ同士の差)であらわせる。たとえば、知能指数でいえば、一卵性双生児の片われ同士の差は3.4、二卵性双生児の場合は6.15であるから、 $3.4/6.15=0.55$ つまり55%が環境に影響される。また、一卵性双生児でべつべつの環境に育ったものを比較することもできる。この方法で、肉体的条件はもつとも遺伝的であり、知能*→アチーブメント*(学力)→性格*という順序で、環境に影響される程度が大きくなってゆくことが明らかにされた。

意図 [⑩ intention, ⑩ Vorsatz] ある機会がくれば行動をしはじめようとする観念。イヌの「おあずけ」の場合のように、一定時間反応をしない(待機)という現象は、動物にもみられるが、意志的の待機を意図という。

イド [⑩ id, ⑩ Es, ⑩ ego] 精神分析のコトバ。精神の奥底にある本能的エネルギーの源泉。快楽求めて不快感をさける(快楽原則?)

に支配され、無意識的で、リビドー*の欲求満足を目的とし、非道徳的・非論理的で、抑圧された観念を含み、すべて人類が過去に(系統発生的に)獲得したものをもっている。[イドと無意識] 上にのべたイドの性質は(無意識*)の性質であるが、(イド)と(無意識)は同じではない。エゴ(自我*)や超自我*にも無意識の部分があるし、すべての本能(先天的適応様式)の存在場所であり、リビドーの貯蔵所という性質は、無意識には存在しない(イドというコトバは、ヴァイスマンが、1889年、細胞の染色質粒を示すのに用いたもの)。

移動 [locomotion] 1) 生活体が自己の運動で位置をかえること。2) レヴィン*では実際の物理的移動のみならず、社会的、概念的移動をふくみ、一般には人と環境の間の関係(生活空間の構造)が変わること。

移動性 [mobility] 人間の別の土地への移住移動、転業・転動などについても用いることがある。

意図的学習 [intentional learning] → 偶然的学習。

イヌ-ネコ-テスト [dog-cat-test] → あいまいさの寛容。

イプサティヴ・スケール [ipsative scale] 個人が自分自身の行動や性格を標準にして他人を評価する場合の尺度(ipsaはラテン語の'自身')。

異方向性 [anisotropy of space] 空間の方向によって物の見え方がちがうこと。

イマーゴ [imago] 精神分析のコトバで、コドモのときに愛した人の理想像。これは、ふつうは異性の親(男の場合は母親)であり、後になって行動を支配する(このコトバは、もとはimageの意味のラテン語で、主物学では変態を終えたのちの成虫を示す)。

意味 [meaning, sense, significance] 1) コトバその他のシンボル*によって表わされた内容であるが、コトバによって意識のなかにひき起こされた心理的なものをまとめてsenseといい、一般的にきめられた側面(すなわち、字引のなかにある定義)をmeaningという。語られたコトバが意味をもつためには、このコトバを受け取る者が了解*したという感情をもつ必要がある。(無意味)とは、感情による実証のない場合(nonsense)、感情的要素が強く心の機微に関係したものである場合(夢など)、内潜性*を示す場合(精神分裂病)、失意識*とくに失語症*などの場合である。2)

コトバやシンボルに限らず了解可能なものを意味があるという。意味とは了解できる内容である。たとえば、ある人が猜疑心(疑い)の強いのは、'何度も他人にだまされたためだ'と了解される。この猜疑心には意味がある。これに反して、精神分裂病者の猜疑心は、その理由を了解できない生理的原因(未だ知られていないが)によって説明できるだけであって、この場合は(無意味)だと称する。

意味空間 [semantic space] イヌとテリアの距離はイヌとネコの間の距離より近いとか、重いものは明るいより暗いに近いというような意味の差をあきらかにするものがSD法であるが、この結果いろいろな概念を空間的に表示することが試みられた。この空間をいう。→SD法。

意味的条件づけ [semantic conditioning] → 意味般化。

意味般化 [semantic generalization] イヌというコトバをきかせながら電流の刺激を被験者に与えることを繰り返すと、条件反射がつくられて、イヌというコトバに対して、電気刺激が与えられた場合と同様の反応(たとえば、皮膚電気反射)が生ずる。ところが、イヌというコトバのかわりにネコというコトバでもスピッツというコトバでも、少しは反射がおこる。これを意味般化という。なお、この場合の条件づけは(意味的条件づけ) (semantic conditioning) と称せられる。

意味飽和 [semantic saturation] 同じコトバを繰り返してきいたり、発したりしていると、意味がぼんやりしてくること。

意味論 [semantics] 机とか親切とかいう記号(シンボル、つまりコトバ)とその記号が適用される(さし示す)対象の関係を扱う科学。言語学では、語形学や音声学 ならんで言語の内容や意味を研究する領域。(一般意味論) (general semantics) は記号にともなう人間の行動を研究し、言語を使うコミュニケーションについての諸問題(説得の方法、宣伝法、誤解や偏見)を扱う。

いむ アイヌの女子のうちにみられる心因性の反応*で、驚いたとき、とくにヘビ(アイヌ語でトッコニ)をみせられたり、トッコニというコトバをきいたり、運動暴発*・反響症状*・カタレプシー*など精神的錯乱状態を生ずるもの。この状態は数分間つづく。習慣化(→ Generalization)する点で獲得反応とは異なり、軍隊で(訓練への適応)といったものの